

# 平城宮朝集殿院南門

独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

## はじめに

平城宮は、藤原宮などとは異なった配置をもつ宮城でした。たとえば、天皇が重要な儀式の際に出御した大極殿や朝堂院を囲む区画が東西でみつかっています(東区画は新旧2時期があります)。ただし、朝堂院南の「朝集殿(朝集堂)」は、東区画でしか確認されていません。

朝集殿院では、東朝集殿が第48次調査で発掘されています。この東朝集殿は唐招提寺に移建され、講堂として建て替えられました。これが平城宮の唯一現存する建物です。これまでの調査では東朝集殿や東築地塀を検出しましたが、これ以外は発掘調査は手つかずで(図3)、院の南半部の様相は不明なままでした。

そこで、奈良文化財研究所では今後数年にわたる調査研究の一環として、朝集殿院地域の発掘調査を計画しました。今回は、その初年度の調査として、朝集殿院を囲う区画施設とその南門(注1)について、存在の有無や位置、形状などを解明することを目的としました(図1)。

調査面積は約1050㎡で2002年1月8日から調査を開始し、現在も継続中です。

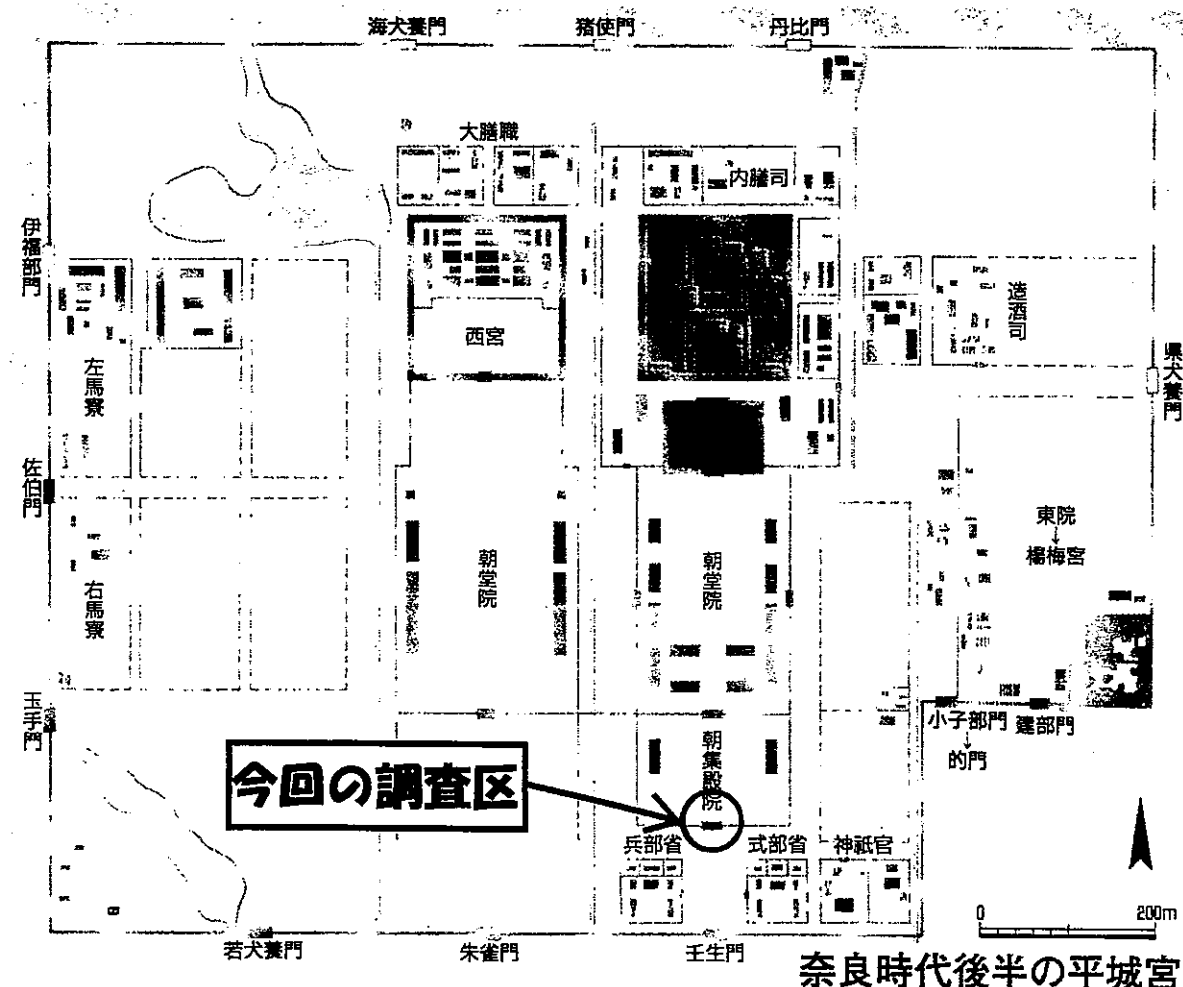


図1 調査区位置図

## 今回の調査でわかったこと

今回の調査でわかった重要な所見は次の2点です。

### ①朝集殿院南門の存在、および規模を確認したこと。

朝集殿院南門は基壇規模が東西26.3m(89尺)×南北13.5m(46尺)で、第二次大極殿院南門とほぼ等しい五間門と考えられ(図8)、掘込地業も施されていました。朝集殿院南門を壊して排水施設が付け替えられたことから、長岡京に遷都する奈良時代末まで、朝集殿院南門が存続していたと推定します。

### ②朝集殿院の利用形態に関する遺構を検出したこと。

朝集殿院南門の北側で、道路や東西側溝のほか、2列の南北柱穴列を検出しました。第二次朝堂院南門の南側でも同様の遺構がみつかり、これらは儀式の際に、旗竿を立てた跡の可能性がります。

## 検出したおもな遺構

以下に挙げるおもな遺構は、平城京廃絶後に堆積した瓦礫層(褐色礫土)の下から検出しました。これまでに検出した遺構は、「奈良時代後半」と「長岡京遷都時」の大きく2時期に分かれます(図6)。

**A期** 奈良時代後半、朝集殿院を囲む築地塀および朝集殿院南門が造られた時期です。門の北側には道路1が北へ続き、その両脇には溝1・溝2が開削されました。

**朝集殿院南門** 後世の削平により、基壇上部の積土はまったく残っていませんでしたが、掘込地業と基壇外装の地覆石の抜取痕跡、足場穴などを確認しました。

「掘込地業」とは、基壇を造る前に地盤を掘り込み、土を層状に積んでつき固め(版築)、強固なベースを造る仕事のことで、地盤が悪い場所や大型建物を建設する場合におこなわれます(図7)。南門では、粘土と砂の層を5~10cmの厚さで交互に積む様子が最大約30cm確認できました。同様の掘込地業はこの近くでは壬生門でもみつかりました。

「地覆石」とは、基壇の外側の一番下に敷く化粧石です。この地覆石により、基壇の縁の位置や基壇外装の形態がわかります。今回、地覆石の抜取痕跡を基壇の全面で断続的に確認しましたが(幅30~50cm、深さ5~15cm)、階段部分の折れ曲がりには検出できませんでした。門の基壇外装は、調査区内で多数出土した凝灰岩から、凝灰岩を使った壇正積基壇と推定できます。

地覆石の抜取痕跡から、南門の基壇規模は、東西26.3m(89尺)×南北13.5m(46尺)と判明しました。これは、朝集殿院の北側の第二次大極殿院南門の規模(東西87尺×南北46尺)とほぼ等しくなります(図8)。今回、礎石据付痕跡や階段痕跡は検出できませんでしたが、第二次大極殿院南門を参照すると、朝集殿院南門の建物規模は正面5間×側面2間の五間門、すなわち東西22.2m(75尺)×南北8.9m(30尺)とすることが可能です[柱間寸法は桁行・梁間とも15尺(4.4m)等間、基壇の出は桁行8尺(2.4m)・梁間7尺(2.1m)]。

さて、朝集殿院の南北規模は、南門と第二次朝堂院南門との心々距離で約128m(433尺)となります。一方、東西規模は、第二次朝堂院南門と東築地塀(第267次)との心々距離から約176m(595尺)と推測されます。ちなみに、壬生門との心々距離は約122m(411尺)です。

なお、第二次朝堂院南門などでみられた下層の掘立柱建物は未検出で、奈良時代前半の様相はまだわかっていません。

足場穴は、基壇から50cmほど離れた位置と地覆石採取痕跡に重複する位置で、不揃いの柱間で並んでいました。前者は門の建設、後者は解体にともなうものと考えられます。

**道路1** 南門の北で南北に延びる道路。舗装は削平されてしまっており、まったく検出できませんでした。ちなみにB期の側溝である溝3・溝4の心々距離は約24.3m(82尺)です。

**溝1・溝2** 道路1の両側で北から南に流れる排水施設(幅は60~100cm、深さ15~20cm)です。南門の北東・北西隅を迂回して鍵の手に折れる部分のみを検出しましたが、南門の北側中央部や東西新溝の南にはなかったことから、門の北側や築地北側では、後述のB期の溝3・溝4と同じ位置にあったと考えられます。すなわち路面の東西で北から南に排水し、門と築地塀を迂回して、築地北側で東西に水を逃がしていました。ちなみに、壬生門にも、門と路面を迂回する排水施設があります。

**築地塀** 南門の東西に取り付く朝集殿院の閉塞施設。今回は東で築地本体の基礎部分を部分的に検出しました。しかし規模は東西ともに不明です。溝1・溝2が東西新溝の南で検出できず、東西に折れ曲がることから、門の両脇に築地塀などがあったとは考えられます。しかし、溝の曲がりかたがほぼ門の心にあたることから、築地はこれよりも南にあることになり、築地の心が門の心よりも南にずれそうです。

**南北柱穴列** 南門の北側の道路1上、南門の中軸線から東西対称の位置にある南北方向の柱穴列です。それぞれ南北に4基以上並びます(各柱穴間は約6尺)。溝6の南に限って見つかりました。南北塀列か、もしくは儀式用の旗竿を立てた跡の可能性がありますが(注2)。ちなみに、南北柱穴列の東西距離は19.5m(66尺)で、これは第二次朝堂院南門(第265次)の南で検出した、対の南北柱穴列の東西距離と等しくなります。第265次調査では、儀式用の旗竿の穴と推測しています。

**溝6** 南門北縁から約11m北にある溝1・溝2をつなぐ東西溝(幅100~200cm、深さ10cm程度)で、B期まで存続したと推測しますが、B期最後に埋まった最終段階の姿で検出しました。

**小型施設1** 南門北側中央にある小穴4基。東西1間[柱間2.7m(9尺)]×南北1間[柱間1.8m(6尺)]で、南の穴は地覆石採取痕跡から北に1.5mの位置にあります。性格は不明です。

**B期** 長岡京への遷都にともない朝集殿院南門が廃棄された時期です。門はなくなりましたが、南北に走る路面と築地塀は部分的には残っていたようで、門基壇を壊しながらも築地塀を迂回する溝3・溝4が開削されました。

**溝3・溝4** 溝1・溝2を壊して造られた排水施設で、溝心々距離は約24.3m(82尺)です。基壇隅を大きく削り、築地塀北で東西に逃げます。幅130~200cm、深さ10~25cmで、大きく2層に分けられます。下層は灰色砂層、上層は黄灰色粘土層で、下層には瓦が多く入っていました。ある期間は排水施設として機能していましたが、最後には瓦が大量投棄されてしまったようです。

**溝5** 溝3から西に延びる東西溝(幅約90cm、深さ10cm弱)です。門基壇部分を壊しており、埋土には瓦や凝灰岩がたくさん入っていました。

**溝7・溝8** 道路1のほぼ中央で、北から溝6に合流する2条の南北溝です。まず溝8(幅約100cm、深さ10cm程度)が開削され、次に東半に溝7(幅50cm強、深さ15cm程度)ができた

す。溝6は北にあふれたらしく、溝4・溝6・溝7が囲む部分には砂が厚く堆積していました。

## 出土遺物

古代の出土遺物はおもに瓦磚類で、土器類・金属製品類などはほとんど出土しませんでした。軒瓦は奈良時代初頭のもものが多少出土していますが、大半は恭仁京遷都・平城京遷都前後のもので、軒瓦以外に鬼瓦もそれぞれの時期のもものが出土しました。なお、平城京廃絶後の瓦礫層の中からは、中世の瓦器片が少量出土しています。

## むすび

以上が今回の調査における現段階の所見です。しかし東区画の大極殿院や朝堂院などでは、新旧2時期あり、下層の掘立柱建物や区画施設がみつかっています。今後は、下層の門および区画施設の有無を中心に、確認調査をおこなう予定です。

(注1) 平城宮の朝集殿院南門について直接述べた可能性のある文献史料は、次の『続日本紀』天平神護2年(766)5月4日条しかありません。

大納言吉備真備朝臣奏して、二柱を中壬生門の西に樹つ。其の一に題して曰く「凡そ官人に抑屈せらるる者は、此の下に至りて申し訴うべし」と。其の二に題して曰く「百姓冤枉せらるること有らば、此の下に至りて申し訴うべし」と。並びに彈正台をして、其の訴状を受けしむ。

吉備真備の建言により、「中壬生門」の西に2本の柱を立て、不当な処分を受けた役人や庶民の訴訟を、彈正台に直接受けさせることにする、という内容です。ここにでてくる「中壬生門」については、今回の発掘区である朝集殿院南門を指すという考え方と、それよりも南にある宮城十二門の壬生門を指すという考え方、の2説があります。

(注2) 平安宮に関する史料によると、元日朝賀や即位式などの重要な儀式の際、平安宮の諸門には武官が隊列し、旗などが立て並べられました。応天門(位置からすると、平城宮の朝集殿院南門に相当します・図4)も、通常は門の南側の左右が対象になりました。しかし、外国使節が元日朝賀に参列する際には、通常は朝堂院南門の南側に並ぶ武官が、特別に応天門の北側に隊列し、旗が立てられることになっていました。左右それぞれ、鷲像幟幡1本、鷹像幟幡2本、小幡49本です。以上のことを述べた『儀式』元正朝賀儀の記載を掲げておきます。

…左右近衛中将は將監以下を率いて、大極殿の東西の階下に隊す。…大・少將、將監以下を率いて蒼龍・白虎兩樓の北辺に隊す。<若し蕃客の朝拜有らば、龍尾道の下に隊す。其の隊幡・小幡は各おの数を倍にす。>龍像幟幡一旒<戟を加う。其の戟は預かじめ前に儲え備う。余は皆、此に准ず。>、執纛・執戟各四人…鷹像幟幡四旒、小幡?二旒…鉦・鼓各一面…擊人各一人、執夫四人…。(以下、武官たちの配置場所、旗などの設置状況が記される)…左右衛門府督は尉以下を率いて、会昌門の外に左右に隊す。<若し蕃客の朝拜有らば、応天門の内に隊す。>鷲像幟幡一旒<戟を加う>、執纛十六人、執戟四人、鷹像幟幡二旒、小幡?(卅)九旒、鉦・鼓各一面。佐は尉以下を率いて、応天門外の左右に隊す。隊幡四旒、小幡卅五旒。尉は門部三人を率いて、門の内に居す。…

今回の調査でみつかった南北柱穴列と関係があるかもしれませんが、詳細は今後の検討課題です。



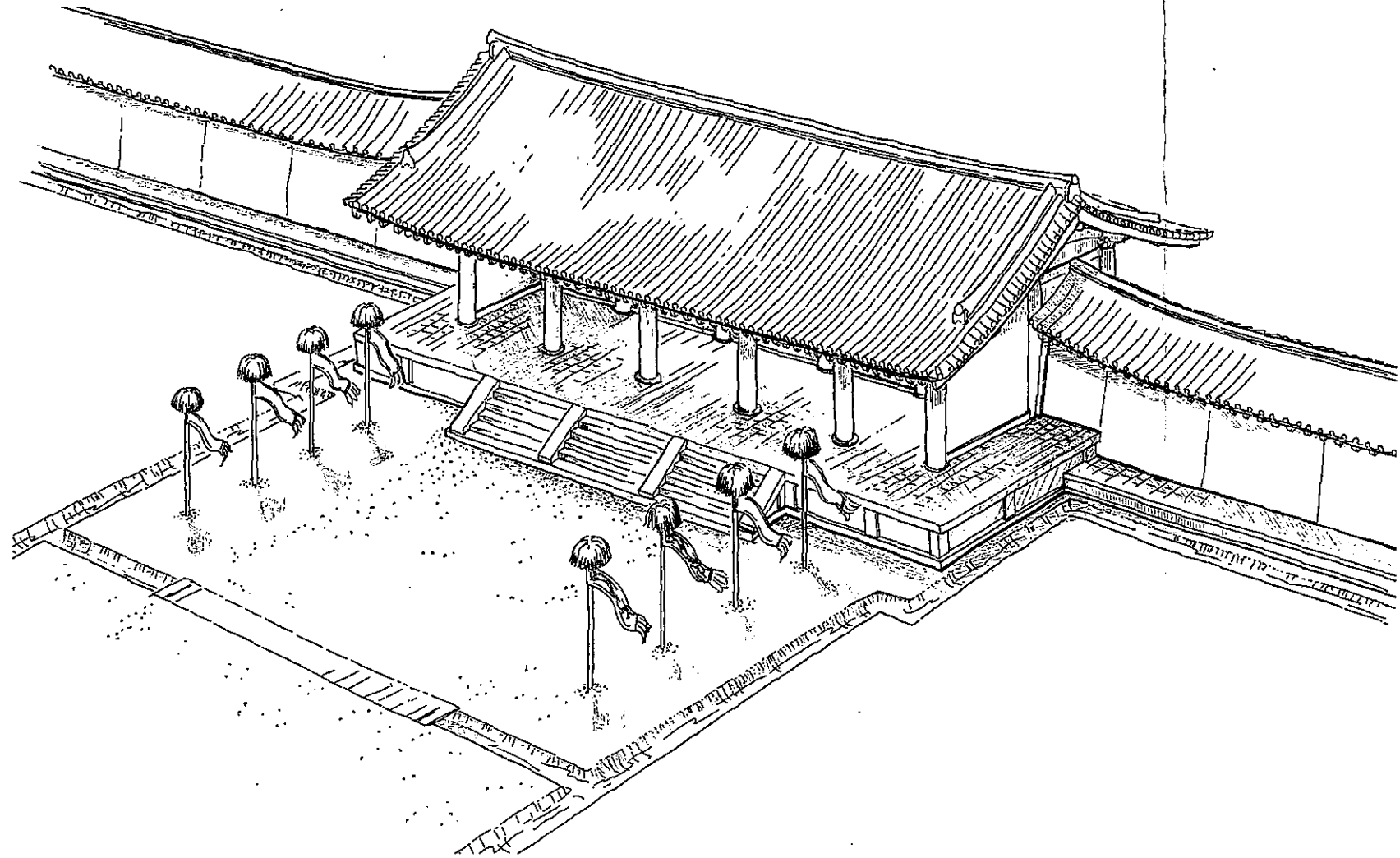


図5 朝集殿院南門 イメージパース (北西からみる)

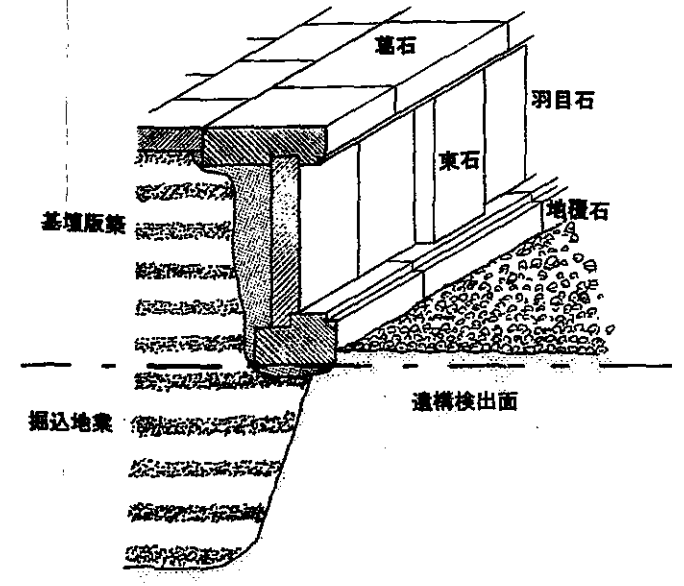


図7 壇正積基壇詳細図

(文化庁文化財保護部『発掘調査の手びき』国土地理協会所収図 一部改変)

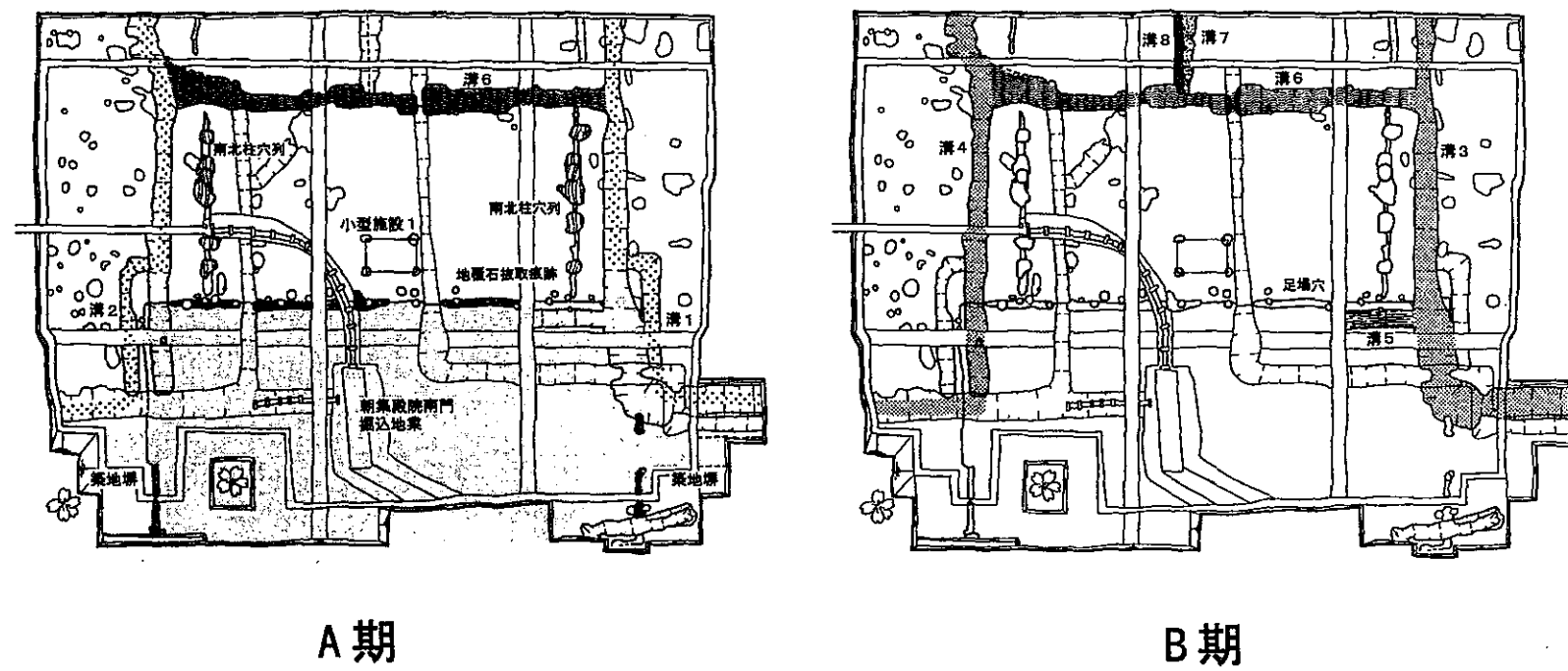


図6 遺構変遷図

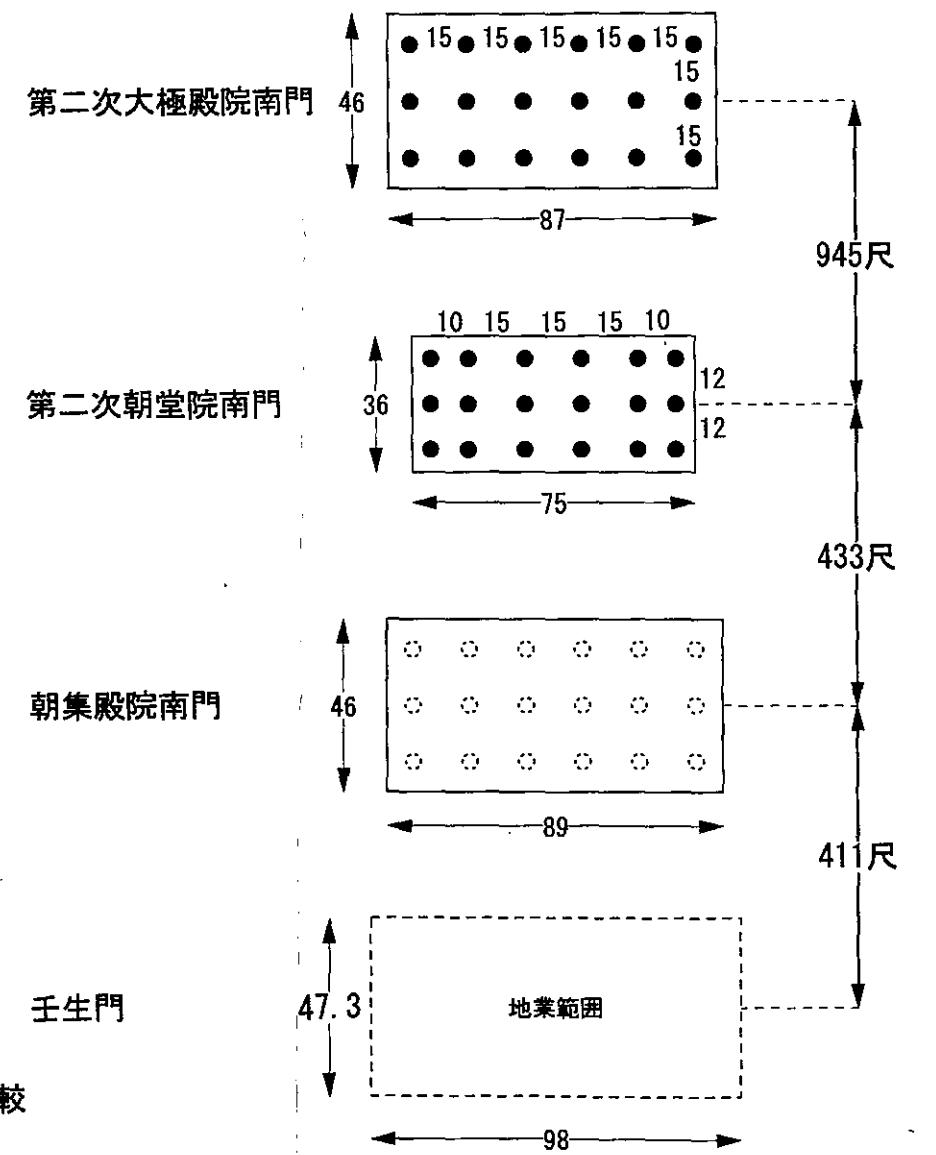


図8 平城宮門規模比較 (奈良時代後半)